

【代表研究者】

中田 英樹

京都大学大学院 農学研究科 博士課程

【研究題目】

ラテンアメリカ先住民共同体への換金作物の浸透と地域変容に関する研究

グアテマラ山間部のマヤ系先住民コミュニティにおけるコーヒー栽培を事例として

【研究の目的】

グアテマラ先住民は、現在、マイノリティとしての自らの解放を二つの流れのなかで模索している。第一は民族差別に対してである。二十世紀後半の内戦期、“遅れたマヤ文化を担う先住民は共産主義左翼ゲリラに利用されている”とされ、虐殺の対象となった。現在はこの構造を批判し、マヤ文化やその担い手たる先住民としての社会的尊厳を勝ち取ろうとしている。

第二は世界資本主義がはらむ矛盾に対してである。近年積極的に推進されている山岳地帯でのコーヒー栽培は、確かに地域に新たな現金収入手段を与えるが、共同体内での階層分化や、新たな国家資本主義での被従属関係を誘発する。さらにコーヒー栽培導入による社会変容は、当該地域の伝統的なマヤ文化を衰退させる要因ともなり得る。

以上を総合的に射程に入れた先行研究は、管見ながらほとんど存在しない。本研究は、事例研究を通じてこの作業への糸口を提示することを目的とするものである。

【研究の内容・方法】

< 聞き取り >

申請時に予定していた通り、当村におけるコーヒー栽培導入に関して、栽培を展開している村人および、村に栽培が導入されつつも頑なにそれを拒否し続けてきた村人に聞き取りを行った。また、別欄「結論・考察」に記す観点から、当村での先住民素朴画家たちにも、絵画創作活動にまつわるライフ・ヒストリーをポイントとした聞き取り調査を行った。また、これは申請時に予想していたことでもあるが、当村での農業史に関して史料が十分ではなかったため、複数の前村長など村の歴史を比較的俯瞰できる人たち（おもに老人）から、過去の歴史に関する聞き取りを行った。

< 資料収集 >

一方、対象事例をよりマクロな枠組みから論じるべく、国立大学をはじめとする諸研究機関で、関係する先行研究を収集した。また、良質な先行研究を紹介してもらうべく、本研究のテーマに近い研究に従事している、諸機関での「先輩」からアドバイスを頂いた。これら作業を経て、十分だと見なせる本研究テーマに関する二次文献は入手できたと思われる。

また、聞き取りを進めていくなかで、南部プランテーションへの出稼ぎ労働が鍵を握ることも解った。この出稼ぎ労働は、村の人口増加などの内圧に加えて、歴代政府の強制的な労働動員と

いう外圧にも起因していた。従って、グアテマラ国立コーヒー協会や、国立銀行、国家統計局などで、労働法規や裁判記録、プランテーションでの労働記録などを、二十世紀全般を対象に収集した。現段階で収集できたこれら史料は、決して十分とはいえないが、一方での聞き取り作業を補完的に援用することで十分な情報が得られると考える。

上記作業は、まだとりまとめの最中であるが、十分に成果として形にすることが可能だと思われる。公刊次第、貴財団に報告して成果を還元したいと考えている。

【結論・考察】

まず、現地での聞き取り調査から、栽培者の基づく行動規範が決して資本主義的な経済人のそれに還元できないことを実証した。さらに、グアテマラ内外における文献・資料収集から、サン・ペドロにおけるコーヒー栽培導入の近代史を再構成し、栽培導入のプロセスが、決して「伝統的なマヤ系先住民共同体」の崩壊および近代資本主義社会への移行というプロセスに還元できないこと導いた。サン・ペドロはサン・ペドロ固有の歴史的展開を経てきたのである。しかしこの結論は、「マヤ系先住民共同体」という一般命題の“下位に属する、異なる一つ”といった“例外”“特殊”として片付けることはできない。このポイントは、当村における先住民素朴画でもって、きわめてシャープに例解され得ると考える。目下この素朴画の議論までを論文とすべく、鋭意推敲中である。